香港日資源委員会出先機関から接收した鉱石のほか、朝鮮ものをも含む香港の全ストックを買漁って本口へ送ったのかも知れない。

二、アンチモニー

アンチモニーは小銃弾、防火布用塗料、ゴム硬化剤、バビット・メタル、活字、医薬顔料などの製造に使われる重要資源である。中國は從前世界アンチモニー需要量の七〇%を供給していた。一九三八年以来、ボリヴィア、メキシコなどの生産に及ばなくなっているが、潜在的供給力からすれば、中國は依然として世界に冠絶している。

中口のアンチモニー鉱の埋藏量は「第五次中國鉱業紀要」によると、總量約三七〇万トンで、その地域別賦存状態は次のようである。

中國アンチモニー鉱埋藏量

地域別	鉱量
湖南省　新化縣錫鉱山及びその附近	二、二〇〇、〇〇〇
益陽縣板溪	二五七、〇四〇

宜章県長城嶺その他	七二〇、〇〇〇
広西、雲南、四川その他諸省	五〇〇、〇〇〇
合計	三、六七七、〇四〇

一九四八年の「中華年鑑」には、全國のアンチモニー埋藏量を三八〇万三千トンとしており、楊志鴻氏の最近の記述「鋒」（工商新聞周刊二巻四号）では、總埋藏量を五七〇万トンとしている。

過去において、中國のアンチモニー生産が最も活況を呈したのは、第一次大戦中のことで、一九一四―一七年には毎年三万トン以上を産し、一九一七年には三万八千トンの記録をとゞめている。（世界週報三巻三九号「中國物産展望」三―「アンチモニーの生産と輸出」）また他の資料には、中國のアンチモニー年産の最高記録は四万二千八百トンで、世界生産の八〇％に達したともある。（ファー、イースタン、エコノミック、レヴユー一九四九年五月十一日「中國のタングステン鉱、アンチモニーおよび錫の輸出」）これは年間輸出高を生産高と見做したものであろう。

その後抗日戦争のおこるまでは毎年一万トンないし二万トンの生産をつゞけてきた。世界アンチモニー生産のうちで占める中國産の割合は、一九三二―三六年には六五―七

〇%であった。だが抗日戰爭の勃発した三七年以後中國の生産は激減し、その世界生産に占める割合も低下した。一九三六―四〇年の中國アンチモニー生産の累計は六五、三九七トンであるが、これは同期の世界産額一八五、六一八トンの三五%前後に当っている。（楊志鴻氏前掲記述）

第二次大戰中およびその直後、中國のアンチモニー生産は、世界生産中に占める地位を低下した。アメリカで発行されている一九五〇年版「商品年鑑」によると、主要生産國の生産状況は次のように変化している。

戰前、戰中、戰後世界主要國別アンチモニー生産高　（單位ショート・トン）

國別	一九三七年	一九四〇年	一九四八年
ボリーヴィア	六、五五六	一〇、八一三	一一、二八〇
メキシコ	九、七八八	一一、二八六	六、七九〇
アメリカ	一、〇五六	四一二	五、四一六
中國	一四、七〇二	八、四六九	三、二五一
チェコ	九九七	一、一〇四	一、五九三

ファー・イースタン・エコノミック・レヴュー誌（四九年六巻一九号）によると、一九

四七年一一、七月の中國アンチモニーの生産高は九二八トンで、四八年一一七月には一、七五八トンとなっている。

中國におけるアンチモニー鉱山の最大のものは、湖南省新化県の錫鉱山（固有名詞）である。その採掘方法は主として土法（手工業的方法）であり、機械の設備はきわめて少い。そのほか湖南省では益陽県の板溪、邵陽県の龍山、安化県の黎樹坳、沅陵県の烏溪、淑浦県の柴溪墅、東安県の牛頭寨などが重要な鉱山である。板溪鉱山では一部機械化し、岩石の硬い部分についてはサク岩機を用いているが、他はいずれも人力によって採掘している。

広東省では曲江県下の鉱山が比較的産出が多く、広西省では、宝石山、宝華山、牛尾山、雲南省では文山県および阿迷県の鉱山、貴州省では銅仁県の梵浄山などが知られている。しかし湖南省にくらべると、いずれも産出量は少量である。

中國のアンチモニー鉱は、古くは産地または附近で低精煉され、七〇―七五％の生アンチモニー（重さ一六ポンドの塊）として輸出されていたが、第一次大戦以来は、さらに精煉度が高められ、九八―九九％の酸化アンチモニー（粉末）および純アンチモニー（塊）として輸出されるものが多くなった。精煉方法は一九一〇年に華昌公司によって導入されたヘレンシュミット法に土炉を代用したものが一般化している。

第一次大戰中の最盛期には、湖南省のアンチモニー精煉所数は約一〇〇に達した。（湖南經濟調査所張人价氏編「湖南之鉱業」―訳書中支建設資料整備事務所「湖南省鉱業餘覧」）他の資料によると、当時同省の精煉所は、約二〇〇、その従業労働者は一〇万をかぞえ、日産約六〇トンに達していたといわれる。（楊志鴻氏前掲記述）一九三四年には湖南省建設庁に登記せられたアンチモニー精煉所は四八で、最盛期にくらべると激減しているが、なお同省各種鉱産物精煉所中の八〇％以上を占め、その分布状態は新化県の三一が最も多く、これについで安化県六、益陽県三、新寧県三、邵陽県二、東安県一、湘鄉県一、宜章県一となっていた。（張价人氏編「湖南之鉱業」）ところが戰時中の一九四二年二月の調べによると、精煉所はわずかに一四で、その日産も一〇トンに減っており、四三年には戰争のため全く停頓した。（楊志鴻氏前掲記述）

湖南省のアンチモニー輸出は、外國商人の価格切崩しに対抗するため、一九三三年五月民族鉱業資本の連合組織した湖南全省鮮鉱貿易処によって統制され、一時効果をあげたが、三五年四月この機関は省政府によって支配されて、鮮業連合貿易処に改められ、さらに三六年一月には國民党政府の資源委員会の手に收められて、全國鮮業管理処の一部とせられた。資源委員会は、三七年一月統制を一層強化して、專売制を実施したが、戰争によって一時放棄した。（昭和十五年九月東亜研究所編「中國におけるアンチモニ

ーの生産と流動」）戦後一九四六年から四九年五月までは、再び国民党政府の資源委員会が復帰し、第二区特種鉱産管理処を湖南に設けて、アンチモニーの生産、販売を管理した。四九年五月国民党政府の通貨価値が惨落し、鉱産物の海外売れゆきも停滞したので、統一管理を撤廃し　自由な輸送販売を許した。（楊志鴻氏記述）この間に国民党官僚資本によるアンチモニーの香港持出しが飛行機でおこなわれた。

人民軍による湖南の解放後、アンチモニーの販売は、中南軍政委員会重工業部有色金属管理局によって統制されている。同管理局は、國営鉱山を直営するほか、民営鉱山の生産物の買付をもおこなっている。もと国民党政府資源委員会に属していた新化県の錫鉱山工程処は、中南軍政委員会重工業部に接収せられ、五〇年三月廿一日から同部有色金属管理局湖南分局に属する錫鉱山砿務局と称することゝなった。この砿務局の指導下に、南、北鉱山、南、北精煉所、変電所、機械工場が、それ〴〵独立採算制によって経営せられている。國営の企業単位のほか、私営企業も存在するが、錫鉱山南部の在来の私営鉱山主段楚賢、李益堅、謝幹青、劉仲欽らは、「南源」「源遠」両公司の株式の全部と、その他三公司の株式の一部を人民政府に献納し、前記両公司は現在錫鉱山砿務局南砿廠と改称している。（「アジア経済旬報」七四号）

人民政府支配下のアンチモニー生産は、急速に回復に向いつゝある模様で、中南軍政

委員会重工業部有色金屬管理局によるアンチモニーの生産および買付け実績は、一九五〇年上半期には、計画の一三三%に達したと報ぜられている。（漢口八月十九日発新華社電）

中國アンチモニーの輸出は、戰前においては次のようで、一九一六年には四万四千トンの記録を示したが、第一次大戰後は平均一万五千トン見当であつた。

戰前中國アンチモニー種類別輸出高　（單位トン）

年次	生アンチモニー	純アンチモニー	アンチモニー鉱	アンチモニー滓	酸化アンチモニー	計
一九一六年	一三、二九八	七、三九八	一〇、六七二	一二、六六一	—	四四、〇二九
一九二〇年	四、五五七	九、七二六	一、三五二	一七三	—	一五、八〇八
一九二六年	三、二三八	一八、〇八六	—	—	—	二一、三二四
一九三〇年	二、三二七	一六、〇二四	—	—	—	一八、三五一
一九三六年	二、七〇五	一三、一六八	—	—	一、四三九	一七、三一二
一九三七年	二、二五六	一二、五二〇	—	—	六一二	一五、三八八
一九三八年	五四四	七、一八三	—	—	二五七	七、九八四
一九三九年	一、〇五三	五、七〇七	—	—	—	六、七六〇

（東研「中國におけるアンチモニーの生産と流動」）

戦前における中國アンチモニーの輸出仕向け先は、一九三〇年以前には、アメリカが第一位で、毎年五千トン、ないし一万トン、イギリス向けが第二位で、年々四、五千トンを輸出していた。三一年以後抗日戰争までは左表のように、アメリカ向けよりもイギリス向けが多くなつていた。

戦前中國アンチモニー仕向け地別輸出高　（單位トン）

仕向け地別	一九三〇年	一九三六年	一九三九年
アメリカ	六、八五〇	二、四二〇	—
イギリス	五、〇六〇	五、一三五	—
ドイツ	二、九八〇	二、〇一六	—
フランス	九四五	六二六	—
日本	一、九六〇	三、五一七	六、七六〇
その他	五五六	三、五九八	—
計	一八、三五一	一七、三一二	六、七六〇

（東研「中国におけるアンチモニーの生産と流動」）

戦後一九四六年のアンチモニーの輸出は、金額で一〇、〇二四、一三〇USドル、香港向

け輸出数量三、七八三トン、四七年の輸出金額は一一、五七九、七八五ＵＳドル、香港向け輸出数量四、六二九トン（總輸出量の五四％）、その他アメリカ、ソ連、フランスに輸出され、四八年の輸出金額は五、六一八、五五六ＵＳドル、香港向け輸出数量二、二九六トン（總量の五三％）、その他アメリカ、ドイツ、ソ連に輸出されている。（楊志鴻氏前掲記述）

他の資料によると、一九四七年一一八月の中國アンチモニーの輸出高は五、一五六トンで大部分がアメリカへ輸出され、一部は西欧、カナダおよびインドへ輸出されたとあり四八年一一八月の輸出高は三、〇八〇トンに減少している。（ファー、イースタン、エコノミック、レヴユー四九年五月十一日六巻一九号）、また四八年全年の輸出は四、六九九トンで、うち純アンチモニーの輸出は、四、三一七トンで、前年に比し四九％減、生アンチモニーの輸出は三八二トンで、前年に比し五〇％増となつている。（ファー、イースタン、エコノミック、レヴユー四九年七巻一四号）。

一九四九年中には、多量のアンチモニーが香港へ輸出されたと推定されるが、その数字は不明である。五〇年の香港の中口産アンチモニー輸入高は、二月に華南から一、九〇〇ピクル、三月に華南から六六七ピクル、マカオ経由輸入二四九ピクル、計九一六ピクルがあつたのみで、その後は皆無である。一方香港からの輸出は、五〇年上半期には寡

々たるものであつたが、下半期には激増している。いま一九五〇年の香港のアンチモニー月別輸出入高を見ると左のようである。

一九五〇年香港アンチモニー月別輸出入高　（單位ピクル）

月別	輸入	輸出
一月	—	五五九
二月	一、九〇〇	—
三月	九一大	一七
四月	—	七七
五月	—	五五
六月	—	一六五
七月	—	—
八月	—	二七八九
九月	—	一六八
十月	—	一六、八七五
十一月	—	九、七七二
十二月	—	—
計	二、八一六	三〇、五〇七

（香港政庁貿易統計）

すなわち十一月までの累計では、輸入わずかに二千八百ピクルに対して、輸出三万ピクル以上にのぼつている。これは前年の輸入のストックが積出されたものに違いないがその仕向け地別内訳は次のとおりで、中口向けが約二万七千ピクルの大量にのぼつていることが注意をひく。

一九五〇年一一月香港アンチモニー仕向け地別輸出高

（単位ピクル）

仕向け地別	数量
アメリカ	五五四
イギリス	二、六三八
ドイツ	一六八
タイ	六二
マレー	三三
フィリッピン	三〇
濠洲	一三五
朝鮮	一六五
中國	二六、七二一
計	三〇、五〇七

（香港政庁各月貿易統計より作成）

アメリカ向けは五〇年一月におこなわれただけで、その後皆無、イギリス向け二千六百ピクルは八月に積出されたものであり中国向けは十月に約一万七千ピクル、十一月に約一万ピクル輸出されたのが主である。タングステン鉱の場合と同じく、アンチモニーについても、新中国の国営貿易機関が香港の旧資源委員会所有のストックを接収し、これをソ連・東欧方面へ送るため積庫としているのであろう。

香港における純アンチモニーの相場は、一九四九年三月には、ピクル当り一毎〇ドルであったが、朝鮮戦乱後の五〇年八月には、一八〇ドルとなった。